

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

青年の自己有能感形成要因と大学生活：児童期の つらい出来事、しつけに対する親の関わりから

著者	尾形 和男, 増南 太志
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	19
ページ	91-103
発行年	2019-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001234/



青年の自己有能感形成要因と大学生活

— 児童期のつらい出来事、しつけに対する親の関わりから —

University Life and Factors Contributing to a Youth's Self Competence

Focusing on Parents' Involvement in Disciplining and Difficult Events during Childhood

尾 形 和 男・増 南 太 志

OGATA, Kazuo MASUNAMI, Taiji

自尊感情と他者軽視により形成される自己有能感のあり方は学生の大学生活を左右する重要な要因である。自己有能感が家庭の親子関係の中でどのように形成されるのか、そしてそれが学生生活の質にどのように影響するのか検討を加えた。自己有能感形成に関しては学生の児童期においてつらい出来事に直面した時の父親・母親の対応、また父親・母親のしつけについてどのような状況であったのかを聞いた。結果として、つらい時の出来事よりもしつけが大きな影響力を持つことが示された。具体的には自己有能感の4類型の「全能型」「自尊型」「萎縮型」「仮想型」の中でも、「自尊型」の学生は、父親・母親から「ほめる」対応を施されたと捉えており、「全能型」の学生は、「けなす」対応を施されたと捉えていた。さらに「自尊型」は大学生活を安定的に送る上で、また「全能型」は不安定な学生生活に関連することが示された。

問題と目的

大学生活を送る際に、有意義な学生生活であることは望ましいことである。それは、単なる楽しさとは異なるものであり、友人関係、学業への取り組み、将来への展望など、自己実現にかかわる重要なイベントだからである。

このことと関連する重要なことは、自己の意識の中に自尊感情がどのように存在しているかということである。自尊感情とは自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚（山本, 2005）であるが、現代青年は自己に対する過大な期待感を持っており、そのために

自分を肯定的に評価してくれる人を選択し、相互の対立を回避しながら対人関係を維持しているとしている。同様のことは岡田(2007)も指摘しており、自己を傷つけないような対人関係を持つことによって、他者からの自己肯定感を維持し自尊感情の低下を抑制することに努めているとしている。

また、自尊感情の対極として他者軽視が指摘されている。これは自尊感情を低下させないようにするために、他者を軽視することによって根拠のない有能感を持つと最近の若者の特徴として指摘されている（速水・木野・高木, 2003）。これは仮想的自己有能感

キーワード：青年、自己有能感形成、児童期のつらい出来事、児童期のしつけ、親の対応

Key words : youth, self-competence, difficult events in childhood, childhood discipline, parents' involvement

といわれるものであるが、自己有能感そのものは、自尊感情と他者軽視の2軸を基として想定されるものであり、対人関係の在り方を捉える際にはより具体的な指標として扱われる。

さて、自尊感情がどのようにして形成されるのであろうか。自尊感情は自己肯定感との関連性も強く、その形成に関しては養育環境である家庭環境との関連性で検討されることが多い。同時に家庭を離れて子どもが成長する教育環境との関連で検討されるようになってきている。家庭環境との関連性についてみると、小玉（2010）は小中学生の調査から、子どもが親の養育をどのように捉えているかが子ども自身の自尊感情に影響すること、親の自尊感情が高いほど子どもの自尊感情も高いことを指摘している。また、加藤・中島（2011）は保育園・幼稚園に通う母親の調査から、専業主婦家庭の母親よりも共働き家庭の母親の自尊感情が高いこと、配偶者のいない母親の自尊感情が低いことを明らかにしており、母親の影響について言及している。さらに、春日・宇都宮（2011）は大学生を対象とした調査から、過去に親から受けた期待を感じた程度と現在の自尊感情との関連性について調べ、親からの期待の受け取り方は自尊感情形成に影響していることを明らかにしている。しかも、母親の期待は父親以上に子どもの自尊感情形成に影響していることも指摘している。一方、家庭内の親子関係とは別に家族関係の在り方そのものが子どもの自尊感情形成にどのような影響をもたらしているのかということについて検討が加えられている。加藤・前田・西・江村・目久田・森（2009）は、小学校児童の家庭科でのアサーション・トレーニングにより、家族とのかかわりに関する

自尊感情、友人とのかかわりに関する自尊感情が増加していることを報告している。その解釈として、アサーション行動によって自分の家族関係や友人関係が改善できる可能性に期待を持つことが、子どもの自尊感情を高めるのに役立っているのではないかとしている。また、加藤・西（2010）は小学生の家族関係の在り方と友人関係の在り方に注目し、家族関係における自尊感情が直接全体的な子どもの自尊感情に影響し、友人関係における自尊感情を通して間接的にも全体的自尊感情に影響することを示している。さらに、溝上（2010）は児童期の子どもについて家族関係と両親イメージと自尊感情について分析した結果、関連性が見られず、この時期は家庭の影響よりも学校生活などの家庭外の影響の方が大きいのではないかとしている。

自尊感情は本来的には人間が自律的に判断できるという健全な成長・発達に向けた意味を持つと考えられるのであるが、社会適応を阻害するのではないかという指摘もある（Baumeister, Campbell, Krueger, & Voh, 2003; Crocker & Park, 2004）。そのため、自尊感情形成に関して慎重な立場も見られる（Cigman, 2004）。これに関して、既述のように自尊感情の対極としての他者軽視の視点も入れた自己有能感の在り方も関連していると考えられる。

自己有能感は、自尊感情と他者軽視の両方の視点から捉えられるのであるが、本研究では、速水・木野・高木（2004）の提唱する、他者軽視と自尊感情の高低に基づき、有能感を4類型する。それは、全能型（「自尊感情」「他者軽視」共に高い）、自尊型（「自尊感情」高く「他者軽視」低い）、萎縮型（「自尊感情」「他者軽視」共に低い）、仮想型（「自尊感情」

低く「他者軽視」高い)である。ここで特に問題になるのは萎縮型と仮想型と考えられる。このことについて、増南・尾形(2018)は大学生の自己有能感と学生生活充実感、職業的不安感について調べ、仮想型は自尊型よりも大学生生活に不安を感じ、自己理解の不足、職業決定、職業適応の面で不安を感じていることを明らかにしている。この結果は、自分の能力を低く見ている反面他者を軽視している場合、将来にわたる時間的展望や不安を感じ学生生活全般に不適応を生じていることを示しているのである。また、大学生生活の質について交友満足度、期待感、学業満足度、不安の側面から検討している。その結果、概して自尊型は交友満足、期待感、学業満足において仮想型よりも有意に高く、しかも不安については全能型と自尊型は仮想型よりも有意に低いことを示している。つまり、自尊型は大学生生活全般にプラスの影響をもたらすことが合わせて示されている。

自尊感情に関係する重要な項目として、レジリエンスがあげられる。レジリエンスは「困難な環境にもかかわらず、適応する過程・能力・結果」と定義される(Masten, Best & Garmezy, 1990)ということであるが、近年いろいろな場面でストレスを感じ、悩んでいる子どもたちの精神的回復力をつけるために注目されている。例えば小塩・中谷・金子・長嶺(2002)は、精神的回復力尺度を用い、ストレスを多く経験しつつも高い自尊心を持っている者はそうでない者よりもレジリエンスが高いことを指摘しており、レジリエンスと自尊感情の関係が強いことを示唆している。これに関して、レジリエンス要因の分類方法については研究者間である程度共通認識がされており、Werner(1992)は保護者

や地域などの「環境要因」と気質やスキルなどの「個人的な要因」に分類している。他にOlsson, Bond, Burns, Vella-Brodrick & Sawyer(2003)は「社会環境レベル」「個人レベル」などを指摘している。これらの考えをまとめるとレジリエンスは単一の要因ではなく、各分類の良好な相互作用の結果であるということが指摘されているのであるが(Werner, 1992; Groberg, 2003)、これらの指摘に中にある「個人要因あるいはレベル」では「自尊心」が含まれており、レジリエンスをもたらし重要要因として取り上げられている。

以上のように、自尊感情はレジリエンス形成に大きく影響するのみならず、他者軽視との兼ね合いで自己有能感として個人内の問題として生じることもある。

本研究では、特に自尊感情と他者軽視の両面に強く影響を受ける自己有能感の在り方がどのようにして形成されていくのか検討を加える。Wyman, Cowen, Work, Hoyt-Meyers & Fragen(1999)の親の資質が子どものレジリエンスに影響をもたらすとする指摘に基づき、特に、児童期の親子関係を中心とした場面を設定する。また、同様に幼少期のつらい出来事に対する親の対応も自己形成の上で重要な位置を占めると考えられる。しかし、幼少期の記憶は漠然としており正確性を増す必要があると考える。このような視点から、本研究では児童期のつらい出来事への親の対応、しつけの両面について問い自己有能感形成との関連性を探ることを目的とする。同時に、自己有能感と大学生生活充実感との関連性についても探ることを目的とする。

方法

1. 調査対象:埼玉県某大学学生178名(男

子79名、女子98名、不明1名：平均年齢18.87歳SD=1.13：学年；1年生69名、2年生85名、3年生10名、4年生13名、不明1名）

2. 調査用紙：①児童期のつらい時に父親がどのような対応をしてくれたかを尋ねる20項目（藤井, 2012）。②児童期のつらい時に母親がどのように対応してくれたかを尋ねる20項目（藤井, 2012）。③児童期に父親から受けたしつけを尋ねる10項目（葛西・藤井, 2013）。④児童期に母親から受けたしつけを尋ねる10項目（葛西・藤井, 2013）。⑤有能感を構成する自尊感情測定10項目（Rosenberg, 1965）と他者軽視測定11項目（速水ら, 2004）。⑥大学生活充実感を測定する23項目（大対, 2015）。上記①～⑥の調査用紙は全ての4段階評定で

ある。

3. 調査時期：2019年4月～5月

4. 調査手続き：講義の中でアンケートの趣旨説明を行う。調査は個人的に見るものではないこと、全体として傾向を見るものであることを伝える。また、調査用紙はコンピューター入力後シュレッダーで処理し、個人的な情報が漏れることがないことを伝える。その上で協力して頂ける学生に配布し、記入の上回収した。

結果

1. 質問紙の構造化

本研究で用いた質問紙がどのような構造からなっているのかを明らかにするために因子

表1 つらい時の父親の対応についての因子分析結果（最尤法 プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4
(受容・支持的態度 $\alpha = .912$)				
1. 私にアドバイスした	.963	-.132	.130	-.052
2. 今後どうすべきか一緒に考えた	.912	-.058	.104	-.166
3. 私の話を聞いてくれた	.886	-.072	-.070	-.010
4. 反省点を考えさせた	.799	-.078	.270	-.003
5. 私を励ました	.784	.088	-.107	.075
7. 私に共感した	.654	.184	-.071	.059
6. 私を心配した	.630	.067	-.164	.134
9. 特に何もしなかった（*）	-.483	.019	.172	.396
11. 私を見守った	.416	.119	-.179	.282
10. 私の気晴らしになることをした	.413	.368	-.083	.086
8. 私にいつまでも気にするなと言った	.375	.266	.105	.006
(気遣いの対応 $\alpha = .746$)				
13. わざと明るくした	-.093	.851	.040	-.166
14. 気を遣った	.103	.687	-.019	.007
12. 父親も落ち込んだ	-.038	.656	.033	-.088
16. 私に落ち込んでいることと関係のない話をした	.106	.393	.209	.076
(責める対応 $\alpha = .867$)				
18. 私の非を責めた	.045	-.044	.918	.042
17. 私が落ち込んでいることに対して責めた	-.036	.229	.801	.044
(普段と変わらない対応 $\alpha = .685$)				
20. 私をそっとしておいた	-.037	.005	.021	.774
19. 普段と変わらない態度を取った	.063	-.183	.055	.687
因子相関				
F1				
F2	.528			
F3	-.153	.194		
F4	.005	.269	-.097	

（表中（*）は逆転項目を示す）

分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。

（１）つらい時に父親がどのような対応をしてくれたかを尋ねる質問紙

児童期のつらい時の父親の対応を調べる20項目について因子分析を実施した。因子負荷量.35以上の項目を基準にして4因子を抽出した。第1因子は「受容・支持的対応」、第2因子は「気遣いの対応」、第3因子は「責める対応」、第4因子は「普段と変わらない対応」と命名した。また、第1因子～第4因子の α 係数は順に、.912、.746、.867、.685であり信頼性が高いことが確認された（表1）。

（２）つらい時に母親がどのような対応をしてくれたかを尋ねる質問紙

児童期のつらい時の母親の対応を調べる20項目について因子分析を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして父親の場合と同じく4因子を抽出した。第1因子は「受容・支持的対応」、第2因子は「気遣いの対応」、第3因子は「責める対応」、第4因子は「普段と変わらない対応」と命名した。また、第1因子～第4因子の α 係数は順に、.919、.837、.923、.732であり信頼性が高いことが確認された（表2）。

（３）父親のしつけを尋ねる質問紙

父親のしつけについての10項目について因

表2 つらい時の母親の対応についての因子分析結果（最尤法 プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4
（受容・支持的態度 $\alpha = .919$ ）				
2. 今後どうすべきか一緒に考えた	.965	-.184	.070	.072
1. 私にアドバイスした	.952	-.152	.076	.089
3. 私の話を聞いてくれた	.823	-.098	-.073	-.012
4. 反省点を考えさせた	.818	-.100	.249	-.038
5. 私を励ました	.741	.179	-.123	-.001
7. 私に共感した	.662	.284	-.131	-.033
6. 私を心配した	.498	.346	-.251	.010
8. 私にいつまでも気にするなと言った	.492	.180	.130	-.134
（気遣いの対応 $\alpha = .837$ ）				
13. わざと明るくした	-.082	.772	.148	-.068
12. 父親も落ち込んだ	.025	.713	.029	-.029
14. 気を遣った	-.030	.693	.094	-.003
16. 私に落ち込んでいることと関係のない話をした	-.180	.584	.068	.294
10. 私の気晴らしになることをした	.296	.581	-.037	.004
15. 私の好きな料理を作った	.102	.531	-.091	.028
（責める対応 $\alpha = .923$ ）				
18. 私の非を責めた	.107	.004	.958	.021
17. 私が落ち込んでいることに対して責めた	-.022	.190	.863	-.006
（普段と変わらない対応 $\alpha = .732$ ）				
19. 普段と変わらない態度を取った	-.004	-.049	-.059	1.024
20. 私をそっとしておいた	.074	.159	.145	.509
因子相関				
F1				
F2	.534			
F3	-.250	.168		
F4	.229	.359	.147	

（表中（*）は逆転項目を示す）

子分析を実施した。因子負荷量.50以上の項目を基準にして2因子を抽出した。第1因子は「ほめる」、第2因子は「けなす」と命名した。また、各因子の α 係数は順に、.888、.835であり信頼性が高いことが確認された(表3)。

(4) 母親のしつけを尋ねる質問紙

母親のしつけについての10項目について因子分析を実施した。因子負荷量.40以上の項目を基準にして2因子を抽出した。第1因子は「ほめる」、第2因子は「けなす」と命名した。また、各因子の α 係数は順に、.911、.823

であり高い信頼性が確認された(表4)。

(5) 自尊感情と他者軽視の質問紙

自尊感情と他者軽視の質問紙は、それぞれ単因子構造であり、自尊感情の10項目、他者軽視の11項目をそれぞれ用いた。なおそれぞれの α 係数は.832と.881であり高い信頼性を示している(表5、表6)。

(6) 大学生生活充実感を尋ねる質問紙

大学生生活充実感を尋ねる23項目について因子分析を実施した。因子負荷量.40以上の項

表3 父親のしつけについての因子分析結果（最尤法 プロマックス回転後）

項目	F1	F2
(ほめる $\alpha = .888$)		
2. すごい、すごかったねと言ってくれた	.899	.037
1. 私の良いところを褒めてくれた	.873	-.056
4. 頑張れと励ましてくれた	.868	.058
3. ありがとうと言われた	.638	-.052
5. 頭を撫でてくれた	.615	.039
(けなす $\alpha = .835$)		
7. 私を叱るとき叩いた	.114	.810
6. 私をよく怒鳴った	.056	.773
9. あれはダメ、これはダメと禁止してきた	.086	.751
8. バカとか頭が悪いと言われた	-.202	.609
10. 私のことを無視した	-.171	.606
因子相関		-.359

表4 母親のしつけについての因子分析結果（最尤法 プロマックス回転後）

項目	F1	F2
(ほめる $\alpha = .911$)		
2. すごい、すごかったねと言ってくれた	.945	-.018
1. 私の良いところを褒めてくれた	.926	-.027
3. ありがとうと言われた	.875	-.005
4. 頑張れと励ましてくれた	.860	.017
5. 頭を撫でてくれた	.567	.043
(けなす $\alpha = .823$)		
7. 私を叱るとき叩いた	.054	.825
6. 私をよく怒鳴った	.092	.806
9. あれはダメ、これはダメと禁止してきた	.054	.696
8. バカとか頭が悪いと言われた	-.112	.617
10. 私のことを無視した	-.186	.496
因子相関		-.330

目を基準にして5因子を抽出した。第1因子は「大学生活への期待」、第2因子は「大学生活充実感」、第3因子は「孤独感」、第4因子は「友人・学生生活への不安」、第5因子「学業満足感」と命名した。また、各因子の α 係数は順に、.879、.846、.747、.697、.810であり、高い信頼性が確認された（表7）。

2. 自己有能感の類型化

自尊感情と他者軽視の2つの質問紙の尺度平均得点を算出したところ、それぞれ2.467と2.271であった。この平均得点を元として、Ⅰ：全能型（自尊感情、他者軽視共に平均得点以上）、Ⅱ：自尊型（自尊感情平均得点以上、他者軽視平均得点未満）、Ⅲ：萎縮型（自尊感情、他者軽視共に平均得点未満）、Ⅳ：仮

想型（（自尊感情平均得点未満、他者軽視平均得点以上）の4類型に分類した。

3. つらい時の父親・母親の対応と自己有能感との関連

青年が児童期のつらい出来事に対する親の対応をどのように捉えているのかという視点に基づき検討を加えた。

父親あるいは母親の対応を自己有能感の4類型ごとに比較し、有意差が見られた場合には多重比較（Tukey法）を実施した（表8）。結果に示すように、児童期のつらい出来事に対する父親・母親の対応に関しては、母親の責める対応においてのみ有意な傾向がみられたものの、4類型ごとの自己有能感の間には有意な差が確認されなかった。

表5 自尊感情の項目

項目	α
1. 私は自分に対して肯定的である	.832
2. 私は、人並みには価値のある人間である	
3. 私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい（＊）	
4. 自分が全くダメな人間だと思ふことがある（＊）	
5. 私はいろいろな良い素質を持っている	
6. 私は何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ（＊）	
7. 私は物事を人並みには、うまくやれる	
8. 自分には、自慢できるところがない（＊）	
9. 私は自分のことを敗北者だと思ふことがよくある（＊）	
10. 私はだいたいにおいて、自分に満足している	

（表中（＊）は逆転項目）

表6 他者軽視の項目

項目	α
1. 自分の周りには気のきかない人が多いと思ふ	.881
2. 自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと思ふ	
3. 自分の代わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りには少ない	
4. 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる	
5. 世の中には、常識のない人が多い	
6. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	
7. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	
8. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	
9. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	
10. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	
11. 他の人を見ていると「ダメな人だ」と思ふことが多い	

表7 大学生生活充実感についての因子分析結果（最尤法 プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4	F5
(大学生生活への期待 $\alpha = .879$)					
10. 大学で今後の生き方について考えられそう	.884	.051	.040	.110	-.118
9. 大学で自分が成長できそう	.788	.060	.000	-.024	.113
5. 大学で学ぶことで自分を深めることができそう	.715	.028	-.002	.083	.082
6. 自分のやりたいことが大学でできそう	.610	-.011	-.039	.073	.172
8. 興味のあることが大学で学べそう	.487	-.022	-.017	-.057	.419
1. 大学ではいろいろな可能性が開けていると思う	.438	.379	.208	-.108	-.066
(大学生生活充実感 $\alpha = .846$)					
17. 大学生活が楽しい	-.019	.901	.098	-.097	.036
13. 大学は居心地が良い	.229	.699	.075	-.027	-.180
2. 学内の友人関係に満足している	-.086	.650	-.354	.158	.067
15. 大学では周囲に溶け込んでいる	.102	.488	-.080	-.075	.060
18. 大学の授業が面白い	-.044	.449	.215	-.124	.284
11. 大学では周りの人と楽しい時間を共有している	.363	.438	-.215	.151	.021
(孤独感 $\alpha = .747$)					
22. 大学の友人の中では浮いていると感じる	-.057	.168	.807	.045	.034
19. 大学で孤立感をおぼえることがある	-.099	.091	.748	.011	.126
3. 大学で寂しさを感じる	.175	-.149	.657	-.019	-.139
7. 大学で本当に親しい人はいない	.173	-.388	.520	-.010	.065
(友人・学生生活への不安 $\alpha = .697$)					
21. これからの大学生活の先が見えず不安である	-.096	.043	.149	.750	.061
4. 将来の進路について不安である	.310	-.122	-.127	.599	-.038
12. 年間の4大学生活で何をしたら良いのかわからない	-.035	.048	.316	.469	-.153
16. この大学は自分に合っていないような気がする	-.163	-.065	.190	.411	.112
(学業満足感 $\alpha = .810$)					
20. 学びたいことが大学で学んでいる	.270	-.074	-.003	.074	.757
23. 自分の所属している専攻の授業内容に属し満足している	.143	.077	.052	-.044	.611
因子相関					
	.534				
	-.338	-.349			
	-.349	-.184	.470		
	.582	.440	-.226	-.332	

4. しつけに対する父親・母親の関りと自己有能感との関連

次に、青年が児童期に親がどのようなしつけを施したと捉えているのかという視点に基づいて自己有能感の類型ごとに検討を加えた。

表9に示すように、父親の場合、ほめる場合は自尊型が仮想型、萎縮型よりも有意に高く、けなす場合は全能型が自尊型よりも有意に高く、また仮想型は自尊型と萎縮型よりも有意に高いことが示された。このことから、父親が子どもをほめることが自尊型の自己有能感形成にプラスの影響をもたらし、けなす

場合は全能型と仮想型形成に関連することが示されたといえよう。

次に母親の場合については、ほめる場合は自尊型が仮想型よりも有意に高く、けなす場合には全能型と仮想型は自尊型よりも有意に高いことが示されている。このことから、母親が子どもに対してほめるしつけをする場合、父親と同じ結果をもたらすことが示され、けなす場合は同様に全能型、仮想型形成に関連することが示されたといえよう。

以上のことから、父親と母親がほめること

表8 つらい時の父親・母親の対応と自己有能感

有能感の類型	I：全能 平均 (SD) n	II：自尊 平均 (SD) n	III：萎縮 平均 (SD) n	IV：仮想 平均 (SD) n	F	多重比較 (Tukey HSD)
(つらい時の父親の対応)						
受容・支持的対応	2.82 (.58) 39	2.69 (.75) 45	2.67 (.65) 29	2.57 (.79) 48	.85	
気遣いの対応	2.03 (.61) 39	1.94 (.77) 45	1.89 (.69) 32	1.80 (.68) 47	.76	
責める対応	2.73 (.70) 39	2.42 (.79) 45	2.41 (.85) 31	2.51 (.90) 48	1.23	
普段と変わらない対応	2.80 (.77) 39	2.77 (.93) 45	2.93 (.84) 32	2.69 (.86) 48	.57	
(つらい時の母親の対応)						
受容・支持的対応	3.26 (.62) 43	3.32 (.67) 44	3.07 (.81) 37	3.09 (.84) 48	1.18	
気遣いの対応	2.64 (.80) 43	2.52 (.70) 44	2.30 (.87) 37	2.22 (.74) 47	2.07	
責める対応	1.94 (1.03) 43	1.48 (.70) 44	1.60 (.93) 37	1.89 (1.00) 48	2.45 [†]	
普段と変わらない対応	2.80 (.93) 43	2.70 (.95) 44	2.58 (.96) 37	2.60 (.91) 48	.49	

[†] p<.10

表9 父親・母親のしつけと自己有能感

有能感の類型	I：全能 平均 (SD) n	II：自尊 平均 (SD) n	III：萎縮 平均 (SD) n	IV：仮想 平均 (SD) n	F	多重比較 (Tukey HSD)
児童期に受けたしつけ						
父ほめる	2.77 (.80) 39	3.09 (.80) 45	2.55 (.73) 33	2.47 (.96) 48	4.92**	自尊>仮想**, 萎縮*
父けなす	2.02 (.83) 39	1.61 (.61) 44	1.79 (.75) 33	2.23 (.88) 47	5.28**	全能 [†] >自尊, 仮想>自尊**, 萎縮 [†]
母ほめる	3.20 (.66) 43	3.42 (.61) 44	3.09 (.85) 37	3.04 (.85) 48	2.21 [†]	自尊 [†] >仮想
母けなす	2.18 (.80) 43	1.62 (.69) 44	2.00 (.86) 37	2.09 (.72) 48	4.51**	全能**, 仮想*>自尊

**p<.01 *p<.05 [†] p.10

表10 自己有能感と大学生生活充実感

有能感の類型	I：全能 平均 (SD) n	II：自尊 平均 (SD) n	III：萎縮 平均 (SD) n	IV：仮想 平均 (SD) n	F	多重比較 (Tukey HSD)
大学生生活充実感						
大学生生活充実感	3.08 (0.56) 43	3.06 (0.54) 45	2.85 (0.59) 48	2.80 (0.74) 37	2.38 [†]	
孤独感	2.25 (0.73) 43	1.78 (0.62) 45	2.08 (0.67) 47	2.35 (0.80) 37	5.54**	全能*, 仮想**>自尊
友人・学生生活への不安	2.46 (0.75) 42	2.10 (0.52) 44	2.49 (0.65) 48	2.77 (0.60) 37	8.60**	全能*, 仮想**, 萎縮*>自尊
大学生生活への期待感	3.17 (0.62) 42	3.17 (0.50) 44	2.91 (0.68) 48	2.85 (0.70) 36	3.05*	全能, 自尊>仮想 [†]
学業満足感	3.17 (0.64) 43	3.15 (0.57) 44	3.03 (0.68) 48	2.84 (0.78) 37	2.32 [†]	全能 [†] >仮想

**p<.01 *p<.05 [†] p.10

が自尊型の自己有能感形成に関連することが示され、子どもの行動を認め、受け入れることが共通したプラスの要素として存在することが指摘できる。

5. 自己有能感と大学生生活充実感との関連

ここでは、自己有能感の4類型が大学生生活充実感にどのような影響を有するのか検討を加える。これに関しては既に交友満足ということについて、期待感、学業満足については自尊型が他の自尊感情形態よりも有意に高く、不安については自尊型と全能型は仮想型よりも有意に低い値を示すことが示されている

(増南・尾形, 2018)。ここでは、大学生生活の在り方について孤独感も加えてより具体的な視点から捉えることを試みた(表10)。

その結果、孤独感については自尊型が全能型と仮想型よりも有意に低いことが示された。他に友人・学生生活への不安について自尊型は全能型、仮想型、萎縮型よりも有意に低く、大学生生活への期待感は無能型と自尊型は仮想型よりも有意に高いことが示された。さらに学業満足感については全能型が仮想型よりも有意に高いことが示された。

以上の結果から、学業満足感以外の大学生

活全般について自尊型がプラスの影響力を持つことが示されたといえる。

考察

大学生を主とする青年期の自己有能感形成に、児童期の親子関係がどのように関連するのかということについて分析検討を加えた。

親子関係の中でもしつけが関連性を持つことが示された。特に父親・母親が子どもをほめる場合自尊型の自己有能感が一番強く形成されることが示されている。また、父親・母親がけなすといった、子どもを受け入れないで拒絶するような場合には全能型が他の自己有能感の類型以上に強いことが示された。このようにしつけの影響力が強いと考えられるのであるが、しつけは幼少期から親子間で展開される中心的な相互作用であり、児童期に至るまでの時間的な長さや親子間の本質的なコミュニケーション手段として存在していることが、子どもに大きな影響要因として存在しているものと考えられる。特に、子どもの自立心が芽生え、自己を主張する頃は自己の能力ややろうとする気持ちや意欲を認めてくれ、受け入れることにより自己の存在をより確かに感じ、成長につながると考えられる。また、しつけは、子どもの自立へ向けたかわりである一方、親として本音で子どもに接する機会であり、子どもの発達上で重要な要素である一方親としての子どもとのかわりのあり方を更に学ぶ機会でもあると考えられる。とりわけ、子どもの発達の視点からみて、自我の未熟な時期から親からの影響を受けて徐々に形成されていくことを考えれば親の影響は大きいといわざるを得ない。

また、しつけと関連性の強い自己有能感については、父親・母親のほめるという対応が

「自尊型」形成に、けなす場合は「全能型」形成に強い影響力を持つと考えられ、親が子どもを受容しながらしつけに当たる対応の仕方が重要であることが示された。しかも、大学生生活充実感との関連性においても「自尊型」の場合、「孤独感」「友人・大学生活への不安」が一番低く、増南・尾形（2018）と類似した結果を示している。つまり、「自尊型」は安定した学生生活を送る上で不可欠な要素として存在することが示されたといえよう。その一方で「全能型」は「大学生活への期待感」において「自尊型」と同じく高い値を示す一方で、「学業満足感」で一番高い値を示しておりプラスの影響を持つことも示された。しかし「全能型」は父親・母親からけなされる場合に形成されやすいのであり、これらのプラスの影響についてはさらに詳細な検討が必要と考える。これに関連して、小塩ら（2002）は、自尊感情とレジリエンスは正の相関を示すことを指摘しており、親からほめられることによって自尊感情が高まり、それがレジリエンス形成促進に影響することを指摘している。したがって、自尊感情の高い自己有能感が形成される場合には、困難にも立ち向かうことができ、全般的には充実した学生生活ができるものとも考えられる。

しつけの効果そのものについて、柳生・相賀・小瀬・松本（2002）はしつけの構造を取り上げている。愛情から派生するものとして位置づけ、自立促進型・後方支援型の側面から捉え、授業適応・授業意欲・集団適応との関連性について検討を加え、母親の方が父親よりも2つの型とも高く、父親は自立促進型のみ高いこと、夫婦揃って自立促進型・後方支援型が高い場合に子どもの意欲に良い影響を与えることを明らかにしている。本研究で

は、しつづけを構造的に捉えておらず、今後構造的な視点を取り入れ、より詳細に分析を加える必要があると考える。

一方、つらい時の父親・母親の対応について自己有能感の類型には強い関連性を有していないことも示された。これについては、幾つかの可能性が考えられる。

第一に、児童期に多くの時間を過ごす学校における出来事に対しては、家庭の影響力が小さいことである。児童期のつらい出来事は発達的に見れば、子どもが小学校に入学して以降、対人関係、勉強など家庭生活から離れて改めて生じる出来事と考えられる。また、学校生活は家庭生活から離れ、新たな友人関係や出来事への遭遇を意味するものであり、家庭からの影響は少なくなるとも考えられる。これについて尾形・宮下（2000）は児童の共感性形成と父親の家庭関与との関連性について調べ、2年生の低学年は父親の影響を受けるものの、学年が上がるにつれて父親の影響力は低下することを指摘している。これは、子どもの生活が家庭から学校中心へと移行していることを示し、家庭の影響力が徐々に低下していることを示すものと考えられる。このように考えれば、学校内で生じる出来事は、子どもにとっては家庭とは切り離された別の世界での出来事であり、親とは切り離された出来事である側面が強いとも考えられる。

第二に、児童期のつらい出来事を親に相談するケース自体が少ない可能性である。これは第一の可能性とも関連するものである。子どもが学校生活の中でいろいろと悩みが生じたとき、その相談相手として親が十分なことができているかということが問われることとなる。このことに関連して内閣府（2007）の報告によれば小学校児童を持つ親へのアン

ケートから、子どもに関わることの認知度について、子どもが困っていることや悩んでいることを尋ねたところ、知っているとする父親は31.4%、母親は65.1%であった。これは小学校全体の結果であるが概して父親の認知度の低さが際立っているといえる。同様に教育基礎情報調査会（1986）の報告では小学校児童が困ったときの相談相手として、父・母・兄弟・先生・友達・相談しない、の各対象を選ぶ場合低学年では男女共に母親と父親を選ぶが、中学年では女子が特に母親を選び、次に友人を高い比率で選択し、高学年では男女共に母親と友人が高い比率で選択されることを示している。つまり、学年が上がるにつれて友人との関わりが強くなるのであり、家庭の影響は相対的に低くなることが示されている。以上のように、小学校児童のつらい時への関わりの中で、親としての影響力の相対的な低下が考えられる。また、一方で小学校児童のつらいことに関連する出来事について、内閣府（2014）の小学生を対象とした調査によれば97.5%の児童は学校生活を楽しいと感じているとの報告がある。また、小学校児童の悩みについては、「勉強や進学のこと（32.8%）」「友人や仲間のこと（12.4%）」「健康のこと（12.1%）」「性格のこと（11.2%）」の順に多く、逆に「悩みや心配なことはない」とする割合は50.3%である。悩みについて、勉強や進学のこととはつらい出来事と捉えるよりは将来の事に関する大事な悩みであり、友人や仲間のことはいじめに関連する事柄も含められると考えられる一方で、それ以外の対人関係のあり方そのものに関連する幅広い事柄が含まれていると推測される。以上のように子ども自身の学校生活の過ごし方から、つらい出来事に出会ったとしても親に相談するが

ケースは相対的に少なく、そのために今回のような結果が生じたのではないかと考えられる。しかしその一方で、児童の生活の場が学校に移行していくことから、つらい出来事に対する対応は、家庭のみならず学校教師や友人も不可欠になって来ると同時に対応のあり方そのものが児童の自尊感情やレジリエンスにも影響すると考えられる。したがって、家庭の両親、学校教師、友人の対応についても分析検討することが不可欠になってくると思われる。

そして第三に、つらい出来事に対する周囲の対応は、自尊感情それ自体には大きな影響を与えないということである。ほめる・しかる等のしつけは、児童のとった行動を評価するものであるため、自尊感情の高低に直接影響するといえる。その一方で、つらい出来事に対する対応については、本人を評価するというよりは、アドバイス等を行うものであるため、自尊感情には直接影響しないかもしれない。しかしながら、つらい出来事に対してどのように受け止めたら良いか等を助言することは、レジリエンスの獲得につながることで予想される。したがって、例えば、自尊感情が低いためにレジリエンスが獲得されていない場合であっても、つらい出来事に対する対応を学習させることによってレジリエンスの獲得につながられる可能性があげられる。ただし、この第三の可能性については、第二の可能性と同様に、つらい出来事に対して、家庭の両親、学校教師、友人の対応の影響を検討する必要があるとともに、レジリエンスへの影響を検討する必要がある。

引用文献

- Baumeister, R.F., Cambell, J.D., Krueger, JI., & Vohs, K.D. 2003 Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles ? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Cigman, R. 2004 Situated self-esteem. *Journal of Philosophy of Education*, 38, 91-105.
- Crocker, J., & Park, L.E. 2004 The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.
- 藤井美沙子 2012 レジリエンスの形成過程－回想された両親像に注目して－ 鳴門教育大学修士論文.
- Groberg, E. 2003 *Resilience for today*. Westport: Praeger Publishers.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2003 「仮想的有能感」を巡って 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 46-47.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 1-8.
- 葛西真記子・藤井美沙子 2013 レジリエンスの形成過程－回想された両親像に注目して－ 鳴門教育大学研究紀要, 28, 295-306.
- 春日秀朗・宇都宮博 2011 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響－子どもの期待に対する反応様式に注目して－ 立命館人間学研究, 22, 45-55.
- 加藤佳子・前田健一・西 敦子・江村理奈・目久田純一・森 敏昭 2009 家族成員の相互関係と児童の自尊感情との関係－家庭科「家庭生活と家族」の領域におけるアサーション・トレーニングの効果－ 学習開発学研究 (2), 39-49.
- 加藤佳子・西 敦子 2010 小学生の家族関係および友人関係における自尊感情と全体的自尊感情との関連 日本家政学会誌 Vol.61. No.11, 741-717.
- 加藤 悠・中島美那子 2011 母親の自尊感情と養育第度－子どもの自尊感情を育むために－ 茨城キリスト教大学紀要第45号, 119-129.

- 小玉 陽士 2010 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響－子どもの認知に焦点を当てて－ 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 321.
- 教育基礎情報調査会編 1986 子どもの意識・実態 主婦の科学社 p156.
- Masten, A.S., Best, K. & Garmezy, N. 1990 Resilience and development: Contributions from the study of Children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- 増南太志・尾形和男 2018 青年の抱く有能感に関する研究－友人選択、大学生活充実感、職業的不安との関連性－ 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 18, 85-96.
- 溝上菜摘 2010 児童期の家族関係と両親イメージが現在の自尊感情に与える影響 仏教大学大学院紀要 教育学研究科篇, 38, 91-106.
- 内閣府 2007 低年齢児の生活と意識に関する調査.
- 内閣府 2014 平成25年度 小学生・中学生の意識に関する調査.
- 尾形和男・宮下一博 2000 父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の自我同一性 家族心理学研究, 14, 15-27.
- 岡田 務 2007 大学生活における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達に関連性について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- Olsson, C.A., Bond, L., Burns, J.M., Vella-Brodrick, D.A. & Sawyer .S.M. 2003 Adolescent resilience: a concept analysis. *Journal of Adolescence*, 26, 1-11.
- 大対香奈子 2015 大学生活充実感を規定する要因の検討 近畿大学総合社会学部紀要, 4 (I), 45-57.
- 小塩真司・中谷泰行・金子一史・長嶺信治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成－ カウンセリング研究, 35 (I), 57-65.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol.11,p.326). Princeton, NJ: Princeton University press.
- Werner, E.E. 1992 The children of Kausai: Resiliency & Recovery in adolescence & adulthood. *Journal of Adolescent Health*, 13, 262-268.
- Wyman, P.A., Cowen, E.L., Work, W.C., Hoyt-Meyers, K.B., & Fragen, D.B. 1999 Caregiving and developmental factors differentiating young at-risk urban children showing resilient versus Stress-affected outcomes: A replication and extension. *Child Development*. 70 (3), 645-659.
- 柳生和男・相賀 直・小瀬絢子・松本浩之 2002 両親のしつけ因子と教室における児童の態度に関する研究 文教大学女子短期大学部研究紀要, 45, 15-26.
- 山本真理子 2005 心理測定尺度集 I ー人間の内面を探る（自己・個人内過程）ー サイエンス社.